

玄界灘を渡った川上音二郎

1 はじめに

日本と韓国に挟まれた海峡を、玄界灘と言う。幅が狭いだけに、潮の流れが速く、波も高い。にもかかわらず、人々は、古くから、その高い波をかき分けながら、半島と列島の間を行き来した。主な目的は中国からの文化移入にあったが、その流れは、近代に入ってから、逆転することになる。西洋の新文明が、怒濤のように、日本を経由して、半島および大陸に流れ出したからである。

演劇の場合も、例外ではない。日本の演劇界は、明治以後、いち早く西洋の演劇を取り入れ、新派劇という新しいジャンルを創り出した。この新派劇を新派たらしめた人に、川上音二郎（一八六四～一九二二）がいる。川上は、四回にわたって洋行し、日本の演劇を西洋に紹介もしたが、主に、西洋の新しい演劇技法を日本に取り

入れ、演劇的実験をしつづけ、現に「新派の生みの親」と言われるほどの業績をあげた。⁽¹⁾

しかし、実のところ、川上音二郎は、西洋にばかり交流を求めていたのではない。日清戦争が勃発した一八九四年の秋、彼は玄界灘を渡り、戦場の韓半島（朝鮮半島）で取材をし、それを自分の演劇に反映している。⁽²⁾そしてそれは、空前の反応を呼び、結果として、新派劇が歌舞伎を乗り越える一つのきっかけとなった。

この玄界灘を挟む川上の足跡は、今まで、あまり報告されていない。よって、本論文では、川上の韓半島体験を取りあげ、川上がいった韓半島で何を見、何を取材したのか。そしてそれを、自分の演劇にどのように反映したのか。ひいては、川上の韓国観はどのようなものであったのか、といった問題を明らかにし、日本新派劇の成立とも関連して、韓国と日本の演劇交流史の一断面を検討してみ

李 応 寿

たい。

2 川上の韓半島訪問

日本の新派というのは旧派、すなわち歌舞伎に対する新しい演劇という意味で、最初は「新演劇」、「改良演劇」、「正劇」などと呼ばれていた。それが明治三〇年代の中頃、つまり一九〇〇年代の初頭に新派という名前に定着して以来、そのまま現在まで演劇のジャンル名として使われている。⁽³⁾

この新派は、角藤定憲（一八六七—一九〇七）に始まると言われている。一八八八年二月三日、いわゆる壮士演劇である『耐忍之書生貞操佳人』と『勤王美談上野曙』を大阪新町座で旗揚げしたのがその理由で、演劇界では、これを新派の出発点として認め、一九三七年二月、東京歌舞伎座で「新派五〇年祭記念興行」という催しを開催した。

しかし、これはあくまでも起源を探る時の話で、実際、新派を新しい演劇として育て、一つのジャンルとして成り立たせたのは川上音二郎である。そしてそれは、日清戦争から素材を取った彼の一連の戦争劇によるところが多い。まず、人気絶頂の時期であった、彼の当時の舞台の状況を見てみよう。

戦争が起ると同時に、大小劇場では競って戦争劇を上演する

ことになったが、そのなかでも斯ういふ機会をつかむのに抜目のない川上音二郎は、その九月、浅草座で真先に戦争劇を上演した。……新聞の戦争記事の切抜きのやうな、芝居らしくもないものであったが、真先に際物を出しただけに其人気は素晴らしい……この興行は大成功であった。⁽⁴⁾

周知のとおり、日本が清国に宣戦布告をしたのは、一八九四年の八月一日である。引用では九月とされているが、実際の封切りは八月三日であったから、一ヶ月足らずで、川上は、もう戦争を素材にした劇を上演し、好評を博していたことが分かる。実に素早い対応と言えよう。

では、このような早さは、どこに起因するものであろうか。それについては、彼の日頃の気質が大いに働いていたように思われる。柳永二郎の次の指摘を見てみよう。

彼は寄席藝人としてはもちろん、後の俳優としても技藝の修業にうちこんで、それによつて自己の地位を築かうといふ考へよりも、その何か世間の耳目を集めて、それによつて一氣呵成に雌雄を決しようといふ性格は、極端な現れを彼の生涯に示して居る。⁽⁵⁾

要するに、川上は、常に奇想天外な発想の持ち主であった。「世間の耳目を集めて、……一氣呵成に雌雄を決しようといふ性格」云々と指摘されているように、川上の一発勝負の性格は、日清戦争の時もそのまま反映され、戦争劇の成功につながった。

もちろん、このような川上の性格は、「オッベケベ節」以来のことである。彼は、一八七七年に一〇歳の若さで故郷の博多を旅立って以来、大阪と東京を転々した後、当時の自由民権運動の拠点であった自由党に入り、中江兆民などの影響の下で政治宣伝の一環として「オッベケベ節」を謡った。その「オッベケベ節」を謡う時の、「緋の陣羽織に後ろ鉢巻き、滝縞の木綿の袴に日の丸の軍扇」という彼の独特な姿は、名物の一つとして錦絵になり、今に伝わるほどである。⁽⁶⁾

そして、このような傾向の「極端な現れを、彼の生涯に示して居る」とも指摘されているように、彼は、一八九一年に「書生芝居」という自分の劇団を結成してからも、観客にとって前代未聞の出し物を舞台に乗せ、好評を博し続けた。『経国美談』、『板垣君遭難実記』、『意外』、『又意外』、『又々意外』などがそれであるが、そのもっとも顕著な現れが、一八九四年の一連の戦争劇だったのである。戦争劇の第一弾は『壮絶快絶日清戦争』であった。七つの幕からできているこの劇は、「新聞の戦争記事の切抜き」云々の指摘のとおり、内容のドラマ性よりは、両国の兵隊が舞台に現れ、パンパン

鉄砲を撃ちあい、煙硝の煙と臭いを劇場内に充満させ、観客を異様な興奮に導くにすぎないものであったが、それでも大成功を収めた。⁽⁷⁾そしてそれは、今のようにテレビ、ラジオ、映画などの生々しい情報伝達手段がなかった当時としては、当たり前なことでもあった。

しかし川上は、このように空前の盛況を続けている『壮絶快絶日清戦争』の上演を、突然、中止する。それは、自ら戦場である韓半島に渡り、戦争の状況を取材し、もっと新しい工夫を加えた演劇を興行したいという意欲に満ちていたからである。

では川上は、どのような経路で韓半島を旅行したのだろうか。当時の新聞に載っている記事を中心にまともてみると、だいたい次のようになる。

川上は一〇月二日、東京芝の湖月楼で開かれた送別会に参加したあと、さっそくその日の新橋発午後九時四五分の列車で韓国に向かった。二七日に慶尚道に上陸し、陸路で晋州、大邱を経て、鳥嶺を越え、忠清道に進み、やがて十一月五日の午後九時、漢城に着く。⁽⁸⁾

その後の経路は、『都新聞』一〇月九日の記事には「大洞江より平壤を経て鴨綠江を渡り、次第に依りては清國內地にまで入り實地を探検」と載っているし、同じく十一月三日には、「六日仁川港に出で御用船隅田川丸に乗込み、海路大洞江を経て鴨綠江に向ひ、歸途平壤に立寄る」というふうに出ているので、断定はできないが、

いずれにせよ、平壤を訪れたことは確かなようである。

平壤は、九月一五日午前〇時から翌日午後四時四〇分の城の明け渡しまで、李鴻章の率いる清の軍隊と日本の混成第九旅団との間で、悲惨な戦闘が繰り広げられた所である。⁽⁹⁾ その最も激しかった戦場を、川上は、戦争が終わって二ヶ月も経たないうちに訪れた。そしてそれは、ほどなく帰国後の彼の演劇に生かされるが、では、川上は、はたして韓半島で何を見、どんな活動をして日本に戻って来たのだろうか。

日清劇素材収蒐の爲渡韓したる川上音二郎は、平壤九連城附近視察の際、清兵の死骸より衣服・刀・劍・旗幟・軍帽、其他種々の物を剝奪して持歸りたれば、此度の演劇には件の實物を利用して可成寫實的に演じるといふ。⁽¹⁰⁾

この記事を読むと、彼が実に多くの物を舞台用の小道具として集めていたことが分かる。引用に出ている衣服・刀・劍・旗幟・軍帽にとどまらず、その他にも青竜刀・奇兵槍・指揮旗などを持ち帰ったことが報じられている。⁽¹¹⁾ そしてこれらは、言うまでもなく写實的な演技のための物であった。

しかし、実は、そればかりではなかった。『都新聞』は一月二二日の記事の中で、「川上は渡韓の上、通辯として嚮導せしめたる

韓人丁無南（チャムナ）を伴ひ歸りたり」と、川上がなんと人間まで連れて来たことを報じている。

チャムナがどんな人物であったかは、いまだにはっきりしない。まず先に引用した記事には、韓半島における川上の通訳を担当していた人であることが書かれている。それから、一月二九日の『都新聞』が「川上音二郎は興行中、豫て歸朝の際同伴したる朝鮮人英文（チャムナ）二十三歳を舞臺へ連れて出づる筈」と伝えていることから、二三歳の若い人であったことが分かる。しかし、その外は何も分かっていない。「丁無南」の韓国語読みは「チョン・ムナム」で「チャムナ」に似ているものの、実際、「丁無南」が本名なのか、「以文」が本名なのか、知る術がない。

3 戦争劇の中の韓国人

ともあれチャムナは、当時の新派劇の第一人者である川上音二郎と共に、舞台に立った。演目は、当時の戦争劇の決定版とも言うべき『川上音二郎戦地見聞日記』である。番付けを見ると、他の韓国人役は日本の役者が演じているが、チャムナだけは堂々と本名で名を連ねている。⁽¹²⁾

では、彼は、実際に舞台の上でどんな役割をし、どんな評判を得たのだろうか。

川上が戦地視察の川上を勤めるは、自分の事を自分が演るの
で此位楽な役はなく、又演劇としては此位詰らぬ事はなきよう
なれど……実地を踏んで来たお蔭にて非常の好評。朝鮮より連
帰りたる朝鮮人丁無南が舞台に現れて、頻りと芝居を演て居る
所も亦一興。詰り今度の狂言は、之れを眼目として客を呼び、
其他の幕も勤めて写實的に演ずるより、戦争芝居は此一座に限
るとの評を得たる⁽¹³⁾。

チャムナが舞台に現れて頻りに芝居を演じるのが一興で、これを
眼目にして客を呼んだとあるから、この文章を見るかぎり、チャム
ナはこの劇のなかで、かなり大事な役割を担当していたことが分か
る。

この作品の脚本が発見されていない現在、その具体的な役割を明
確にするのは難しいが、まず一月二八日の『中央新聞』にその場
割りが載っているのを、それを紹介しておこう。

序幕 朱染亭斥候衝突の場、中和清軍屯営竹内少尉憤死の場、

船橋里日軍野営の場、若月大尉奮戦の場

二幕 大同江岸練光亭の場、同附近寺院門前の場、練光亭韓人

惨殺の場、同裏門清將逃走の場

三幕 平壤城内捕虜の場、第一野戦病院の場、義州街道安田軍

医戦死の場

四幕 九連城兵站部の場、同黍畑川上戦地視察の場、小原少佐

戦没の場

五幕 名古屋清水町小原邸の場

六幕 南京道台釈元恭訊問の場、同門外の場

大詰 哥老会蜂起の場

一方、運良く、当時のポスターが早稲田大学演劇博物館に残って
いる(写真1)。それと、今の場割りを照らし合わせてみよう。

私の推測では、第四幕の「九連城兵站部の場」はポスターの「第
十三」の絵に当たり、「同黍畑川上戦地視察の場」は「第十四」の
絵に当たると思われる。そして大詰めの「哥老会蜂起の場」は「第
二十」の絵に当たるとは思ふが、これだけは、どうも内容が一致しな
い。

絵から見ると、どう見ても川上が現地視察を終え、日本に戻って
くる場面のようにある。ポスターの下の部分の番付けには「大詰」
が載っていないことから、おそらく『中央新聞』の一月二八日の
時点から実際開演の一二月三日の間に、筋が変わったようにしか思
えない。

いずれにせよ、三つの絵の中で点々模様の服装をした川上の後ろ
に見えている人物がチャムナではないだろうか。若く見える顔はも



写真1 川上音二郎戦地見聞日記ポスター（早稲田大学演劇博物館 所蔵）73.5cm×45.5cm

もちろん、長い髪の姿と言い、後ろに包みを背負っている姿と言い、当時の韓国の青年の姿そのものだと思われる。

彼が舞台の上でどんな芝居を、それも「頻りに」演じていたかは、この絵だけでは分かりかねるが、常に主人公川上の側近として出演しただけに、世間の注目を浴びていたことは確かであろう。そして彼の演技を「眼目として客を呼」んだのだから、彼は通訳の能力だけでなく、一定の水準の演技力も身につけていたことが認められる。

一八九四年一月三日から二三日まで、東京市村座で上演された一種の戦争報告、すなわちルポルタージュ (reportage) 劇であるこの『川上音二郎戦地見聞日記』は、当座で立錫の余地もないほどの大成功を収めた。それにとどまらず、横浜の港座（一八九五・一・二一～一六）、名古屋の末広座（三・七～一二）、筑前若松の朝日座（三・二五～四・一一）、そして川上の故郷である博多の教業社（四・一五～二四）で、延べ七〇日を超えるいわゆるロング・ランを記録した⁽¹⁴⁾。そればかりか、一月九日には、上野の博物館前の庭で皇太子、後の大正天皇による天覧にあずかるという光栄に浴した。

これで演劇界における川上の名は、確固たるものになった。このことについて岡本綺堂は『明治の演劇』のなかで、「歌舞伎と新派劇と二つの王国ができた」と説明している。そして河竹繁俊は、『日本演劇全史』のなかで新派の流れを「発生期・興隆期・全盛期・衰退期・中興期・新生新派期」の六つに分けているが、その第

二段階である「興隆期」を、ちょうど川上の一連の戦争劇が上演された明治二十七年、すなわち一八九四年に当てている。⁽¹⁵⁾

この二つの指摘からだけでも、日本の新派劇は川上戦争劇の成功によって初めて完全に成立したものであると言えるだろう。そしてその裏に、ささやかではあるが韓国人チャムナの活躍があり、日清戦争の戦場であった韓半島が存在していたことは、今まで見てきたとおりである。

では、チャムナのその後の日本での活躍はどうだったのだろうか。残念なことに、その後の演劇界でのこれといった活躍ぶりは見あたらない。私の調べでは、翌年の一八九五年一月三〇日から二月二十四日まで、市村座で上演された川上一座の『戦争余談明治四二年』という作品に、「岩田の下女おせん」として登場したのが唯一である。⁽¹⁶⁾

名前から見ると女形のはずだから、ますます専門家としての演技力を発揮していたことが推測される。しかし、その後の記録が続かない。もし彼がそのまま日本の演劇界で活躍していたとするならば、あるいは日本の芸名に改名していたのかもしれない。

4 『新国王』の書き手

それでは、以上のような韓半島体験およびそれに伴う戦争劇によって、川上音二郎は韓国に対する明確な認識を持つに至ったのだろうか。もしそうだとするなら、それはどのようなものであったのか。

それを、時期は多少離れるが、『新国王』という戯曲を手がかりに、検討してみよう。

一九一〇年一〇月五日の『大阪毎日新聞』には、次のような記事が載っている。

北濱帝國座は、脚本「朝鮮王」でごたついて擦た揉んだの末、^(ママ)
ちよせん物にはなるまいとの事であつたが、とうとう「新国王」と外題をすゑて、一日から開場した。

帝國座は、伊藤博文（二八四一〜一九〇九）、金子堅太郎（二八五三〜一九四二）などの提案を受けて、実業家の岩下清周（二八五七〜一九二八）が大阪の北浜に建てた劇場である。この帝國座で、『新国王』は上演された。では、『新国王』はどんな内容であったのか。まず、その概略を記しておこう。

早稲田大学演劇博物館に保管されている手書きの筋書きを下に、私がまとめた大筋である。

〈第一場 昌寿殿の場〉

新国の王子竜坤は、個人教師である井殿博士の提唱により、京都大学文学部に留学することになった。博士は進歩的な教師で、朝廷には彼の教育方針に反対する人物も多い。甲伯爵もそ

のなかの一人である。伯爵は、王子の尊厳さに差し障りがあったとはいけないうと、日本での特別扱いを主張するが、博士は、「新しい空気」に接することの大事さを強調し、甲論乙駁が続く。あげくの果て、博士は日本へ行くのを止めたいとまで言い出す。そこで、王子が自分は平民扱いを希望すると申し出る。やっと騒ぎは収まり、王子は祥別堂、孫侍従、そして井殿博士と共に日本へ向かう。

〈第二場 青柳亭の場〉

鴨川沿いにある青柳亭は、伊藤の洋行に随行した香山の経営する料理屋で、ドイツからの輸入ビールを出すなど、ハイカラな所である。王子の宿所でもあるこの店で、井殿博士の友人の桜山男爵、大沢京都大学助教授らが歓迎式を準備する。祥別堂は、オンドルもないし、女性たちの言葉使いが荒いと宿泊に反対するが、折しも歓迎式が始まってしまふ。歓迎の辞は青柳亭のお花が英語で述べることになっていた。女中の身分であるお花は、発音を覚えるのが精一杯であったが、式の後、王子は彼女に心が惹かれる。しかし、お花には許婚者がいた。

〈第三場 青柳亭の王子部屋の場〉

王子は夜遊びに耽っている。祥別堂が待っているなか、今日

も朝六時になって門を叩く。門を開けたお花が真っ黒な王子の手に驚き、訳を聞くと、比叡山からの帰りに芋狩りをして焼いて食べたからだと言う。日本の生活に適応できずリユーマチにかかっていた別堂は、この話で虚しさを感じる。王子は、すでに平民生活に馴れていたのである。その日、王子は東京見物にお花を誘う。お花が着替えに行っている間、朝廷から電報が届く。「急遽帰国せよ」との知らせであった。仕方なく王子は帰朝の途に就くが、戻って来る口実を作るため、井殿博士は残して行く。

〈第四場 王宮の王子の居間の場〉

王子が帰朝してから一年が経った秋。二週間後には、王子の結婚式が予定されている。しかし、王子自身は笑うこともなく、憂うつな毎日を送り続ける。甲伯爵をはじめ大臣が心配しているところへ、京都から山崎がやってくる。山崎は、王子が京都にいた時、後で部下にしてやると約束した人物である。約束を忘れずに訪ねてきた山崎に、王子は色々と京都のことを聞く。お花のことも聞く。なぜか許嫁者との結婚もせず、笑みをなくした日々を送っているという答えに、王子の心は乱れる。そのせいか、祥別堂を呼んで京都への旅支度を命令する。

〈第五場 青柳亭の場〉

日本入国の際身分がばれてしまった王子は、仕方なく京都府庁の手配したホテルに泊まっている。今日は朝早くから井殿博士のお墓参りをし、青柳亭に向かう。王子来訪の知らせに接した香山夫婦は、至急お花探しに人を行かせる一方、歓迎の準備を急ぐ。王子が青柳亭に着く。しかし、息をつく暇もなく、府庁からの使いが電報を持って現れる。王子は、今日の夜行で帰国しなければならなくなった。そこへ、お花が買い物から戻る。涙の再会の後、二人の顔には久しぶりに微笑みが浮かんだが、それもつかの間、「人間、春ってものは、随分短いものね」というお花の嘆きを後に、王子は出て行く。

この作品は、一読して分かるように、若い王子と身分の低い料理屋の女中との、いわば悲恋の恋物語である。しかしながら、この恋物語の裏には、ある種の政治的な意味が潜んでいた。それは、「擦た揉んだの末、ちよせん物にはなるまい」というさっきの引用で明らかのように、政府当局の検閲で問題になったことからもうかがい知ることができる。

だとすると、まず、この作品を誰が書いたのか、問題になるだろう。『新国王』の作者について、大笹吉雄は、「日韓併合の動きを見て、『朝鮮王』と題して川上が台本を書いたところ」云々と、『新

国王』を川上音二郎自らが書いたことをほのめかしている。⁽¹⁷⁾しかし、実際、川上はあくまでも興行師であり、文筆家ではなかったし、そのうえ、彼は当時、後の死因にもなった腹膜炎にかかっていたため、体調がすぐれなかった。したがって、当時の帝国座の座付作者、すなわち佐藤紅緑（一八七四～一九四九）や柳川春葉（一八七七～一九一八）などが『新国王』を書いていたことが、まず推測される。

しかし面白いことに、川上研究家の白川宣力は、『新国王』は、巖谷小波（一八七〇～一九三三）がドイツの作家マイアー・フェルスター（Wilhelm Meyer Förster 一八六二～一九三四）の書いた戯曲『アルト・ハイデルベルク（Alt Heidelberg）』を翻案したものであると指摘している。⁽¹⁸⁾

『アルト・ハイデルベルク』は、一八九九年に書かれた自作の小説『カール・ハインリッヒ（Karl Heinrich）』を、作家自身が一九〇一年に戯曲化したもので、「ベルリン座」で初演され、一躍にフェルスターの名を高めたばかりか、この戯曲は、年数経たずしてラテン語にも翻訳されたし、英語にも多くの翻訳が出た。上演記録も二〇〇日、三〇〇日のロング・ランはともかく、もっとも成功した時は五〇〇日も打ち通したことがあるという。⁽¹⁹⁾

こうなると、作者の特定がややこしくなってくるが、当時川上音二郎は、たとえば帝国座で、一九一〇年の五月に、巖谷小波の書いたおとぎ芝居の『竜宮のお使』を、子供たちのために無料で上演す

るなど、巖谷小波とは親しい間柄にあったし、また、当時の演劇界では、座付作者の役割がそれほど大きくなかったという現実もあるので、ここでは、取りあえず、巖谷小波について検証してみることにした⁽²⁰⁾。

巖谷小波は、児童文学家でもあり、ドイツ文学家でもあった人で、一九〇〇年の九月、ベルリン大学付属東洋語学校の講師としてドイツに招かれた。一九〇二年の一月に帰朝するまでの二年余のドイツ生活をまとめた『小波洋行土産』の上巻には、「川上一座の興行」という題で、川上一座が三回目の海外公演の一環としてドイツに立ち寄った時の感想を書いた文章が載っている。そして、引きつづく「獨逸人の日本語劇」という文章には、「振付は、川上一座の藤澤浅次郎氏に、下座は中村仲吉嬢、さて下題は『音曲聳』、一名『音楽の力』と云ふので、作者は東洋學校講師、……實はかく云ふ小波なのである」というふうに出ている⁽²¹⁾。

この二つの文章は、巖谷小波が、川上音二郎および貞奴の上演を鑑賞したにとどまらず、自分の書いた作品を、川上の協力を得て上演までしていたことを物語っている。一九〇一年一二月のことであるから、巖谷小波と川上音二郎は、帝国座で『新国王』を上演する一〇年前から、いっしょに演劇活動をしていたことになる。

では、巖谷小波が『アルト・ハイデルベルク』を『新国王』に翻案した可能性は、どうなるのだろうか。

『アルト・ハイデルベルク』が戯曲として正式に日本に紹介されたのは、松居松葉（一八七〇～一九三三）によってのことで、松居松葉は、一九一三年の二月、坪内逍遙の率いる文芸協会の第五回公演として、『アルト・ハイデルベルク』を『思ひ出』という名前に意識し、有楽座で上演している⁽²²⁾。

しかし、巖谷小波は、『思ひ出』に寄せる文章のなかで、「僕は、先年歸朝の後間もなく、京都の日出新聞紙上に、これを翻案した時には、『ある京都』とやつてのけた」と言い、松居松葉よりも早い時期の一九〇三年の時点で、すでにこの作品を翻案していたことを明らかにしている⁽²³⁾。そして実際、この作品は、一九〇三年の三月二七日から六月一〇日まで、七五回にかけて、「あゝ京都」という題の連載小説として『京都日出新聞』に発表されていた。ドイツから帰って来て、四ヶ月しか経っていない早い時期のことである。

しかしながら、「あゝ京都」は、原作とはジャンルが違うだけに、翻案とは言いながら、かなり大幅に脚色されている。後に『アルト・ハイデルベルク』を翻訳した番匠谷英一の指摘する「明るくして哀愁にとめる青春時代の思出を一般觀衆の心に再現せしむる點に存在する」といった、いわゆる恋物語としての原作のテーマそのものは保っているものの、原作から省略された部分が多いばかりか、筋も概略だけを取り、その他の背景などは完全に日本化してしまつた作品になっていたのである⁽²⁴⁾。原作の面影が残っているとすらなら

ば、男主人公のカール・ハインリヒ (Karl Heinrich) 王子を春海家の当主「香留夫」に、その個人教授のユトナー哲学博士 (Phil. Justus) を教育係りの「湯戸」文学士に、属官のルツ (Lutz) を家従「古津」にしたことぐらいにすぎない。⁽²⁵⁾

5 テーマの背景にあるもの

では、戯曲『新国王』の場合は、どうなっているのだろうか。

『新国王』の場合、外形的な構成の変換、すなわち原作のカールスブルク宮殿が朝鮮の昌寿殿に、ハイデルベルク大学が京都大学に変わっているのは、翻案であるから、当たり前なことであると言えるよう。

しかし、内容を見ていくと、たとえば先ほどの小説版「あゝ京都」の中では、王子の留学の目的が、原作と同じくほとんど重視されていなかったのに対して、戯曲仕立ての『新国王』では、王子竜坤の留学目的がことさらに強調されているのが、まず目につく。その部分を見てみよう。まず『新国王』であるが、写真2でも明らかなおと、(一)のなかは、検閲で直される前の表記である。

博士…殿下、今の甲(宋)氏の意見なるものをお聞きになりますか。彼の方は、こ(朝鮮)の城において、殿下を旧習慣の犠牲として置こうとするのみならず、日本の京都において

も、道德の擒にして置こうとするのです。自由の思想、新空氣の漲っている日本の古都、京都の天地に、黴臭いこの国(朝鮮)の空氣を輸入するのは、私の任ではございません。私は、今度のお供は真つ平でございます。

王(子)…博士、そんなにやかましく云うには当たらないじゃないか。博士も、だいぶ年を取ったねー。

博士…殿下、仰せの通り、私も初めてこちら(朝鮮)に参った時には、まだ若うございました。私はこの国(朝鮮)に、東西の思潮を融合したる新文化の理想国を打ち立てようと思つたのです。殿下を教養し奉って、殿下をして世界の新文芸、新美術の大保存者たり、大宣伝者たらしめたいと考えたのです。この国(朝鮮)は、政治上から弱者の位置に立ったかもしれんが、思想の上では、東西両洋の思潮を一团として、新しい光輝ある文明の根源たることができるようにしようと思つたのです。しかし、私は一年にして、自分の理想が空想であつたことを知りました。殿下のまわりの空氣は、そのような文明を醗酵するには、あまりに力がなさ過ぎました。あまり旧習慣になすみ過ぎておりました。で、私は自分の足の底の塵を払って、この国を去ろうかと思ひました……。

王(子)…(かなしげに) 博士……博士……⁽²⁶⁾

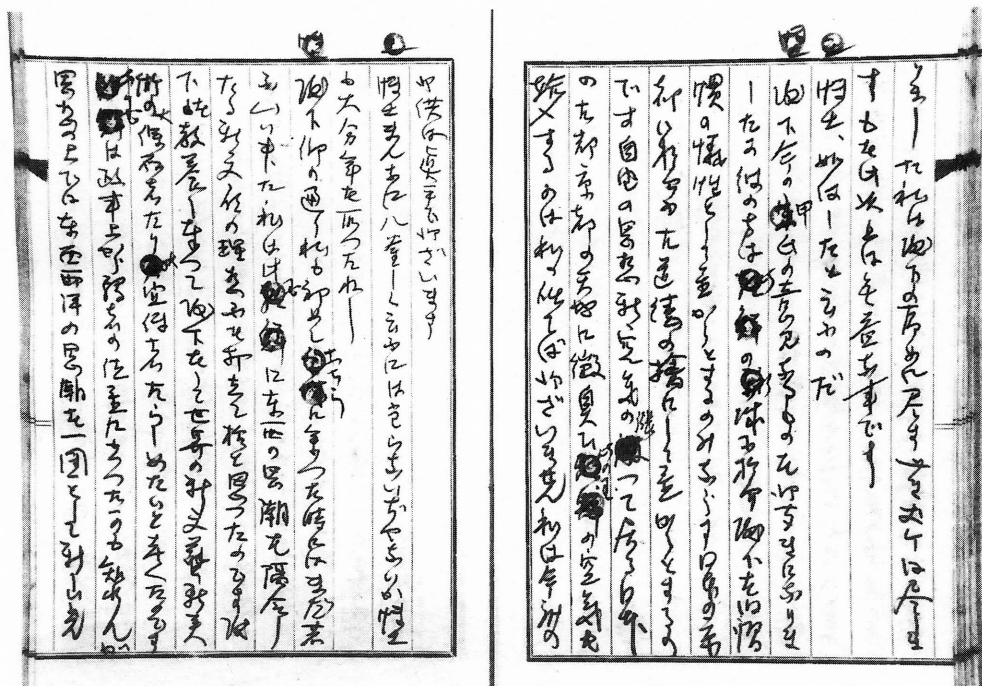


写真2 戯曲『新国王』の原文（早稲田大学演劇博物館 所蔵）17cm×25cm/page

これは第一幕の終わりに近い部分で、王子の個人教授の井殿博士が王子竜坤に留学の目的を述べる場面である。同じ場面の番匠谷英一の直訳および松居松葉の意識に比べて、留学の目的がだいぶ変わっている。引きつづき、番匠谷英一の直訳を見てみよう。

國務卿…ところで顧問官、貴方は今後一年間極めて重要な任務を負はねばならぬ。御承知のごとく、近來諸侯の公子達は一年間大學の課程を修められる習慣になつて居るやうだが、これは「不幸にも」と申上ぐべきかどうか私にも分らないが、とにかく大公殿下に於かれてもこの習慣に従はれ、公子殿下をハイデルベルクへお遣はし遊ばされることに御決心遊ばされた。〈中 略〉

博士（低く）…ところで、ハイデルベルクと來たら。貴方は御存知ない。だからハイデルベルクといふ言葉が何を意味するか、ちつともお分りにならない。いはば三鞭酒^{シャンペン}の味ですーいや、三鞭酒^{シャンペン}どころぢやない。バーデン葡萄酒^{ワイン}とマイ葡萄酒^{ワイン}。若い娘^{プラス}つ子十朗かな大學生ですぞ。私はそこで三年暮しました。カル・ハインツ。しかし私はもう行きませんぞ。

カル・ハインツ…行つたつていゝぢやないか。
博士…一人でいらつしやい。顧問官なんぞお連れなされるな。顧問官が勉學方針書御携帯でハイデルベルクへお供するーふん

「前代未聞のことだ。ぞつとする話だ。これ以外に言ひ方はありませんぞ。」

カル・ハイインリヒ博士、一緒に行つて葡萄酒を飲まうぢやないか。さうすれや貴方だつて氣が變るよ、ね、博士⁽²⁷⁾。

要するに、原作では、「近來諸侯の公子達は一年間大學の課程を修められる習慣になつて居る」のが留学の理由で、それに伴うシャペン・ワイン・若い女の子・朗かな大学生との出会いを楽しみにしている。それに比べ、『新国王』では、「個人教授の井殿博士の提唱により」留学が実現されたのはもちろん、「私はこの国（朝鮮）に、東西の思潮を融合したる新文化の理想国を打ち立てようと思つたのです。殿下を教養し奉つて、殿下をして世界の新文芸、新美術の大保存者たり、大宣伝者たらしめたいと考えたのです。」云々と出ているように、いわば王子への新思潮の教育の意図の下で、留学が行われた。そしてそれは、当時の日韓両国の政治情勢を、そのまま反映するものでもあつた。

それでは、当時の両国の情勢はどうだったのであり、『新国王』は、それをどのように反映していたので、政府当局ともめざるを得なかつたのだろうか。

周知のとおり、韓国が日本に併合されたのは、『新国王』が上演される一ヶ月余前の一九一〇年の八月二二日のことである。しかし、

それは表に現れた結果であつて、日韓併合の運命は、かなり以前からの政治情勢の積み重ねによつていたものと認識しなければならぬ。なぜなら、西洋に対する開国が日本より遅れたことに加えて、

一九〇四年の第一次日韓協約、一九〇五年の第二次日韓協約、一九〇七年の第三次日韓協約などにより、韓国の政治および外交、軍事権は、日韓併合以前から、すでに日本に左右されていたからである。

このような一連の政治情勢の中で、初代韓国統監であつた伊藤博文は、一九〇七年の八月、韓国の皇太子である英親王李垠^(イ・ウン)（一八九七〜一九七〇）の日本留学を提案する。一〇月には日本の皇太子が韓国を儀礼訪問し、その答礼の形を取つて一月から始まつた英親王の日本留学は、結果として生涯国へ帰ることのできない不幸な道りになつてしまつたが、ともあれ、韓国としては未曾有の出来事であつただけに、大々的な行事として執り行われた。

日本騎兵二個小隊が前後を警衛し、各学校生徒、各界紳士、一般民衆が沿道の左右に林立して万歳を連呼するなか、英親王の個人教授である太子大師の伊藤博文の乗つた馬車が先導し、統監府官吏、宮内府大臣李允用^(イ・ユンヨウ)、農商工部大臣宋秉畯^(ソン・ビョンジュン)、東宮大夫高義敬^(コヒキョウ)らがこれに従う。そして、陸軍参尉の服装をまとつた英親王が、侍従武官長趙東潤^(チョウドジュン)を陪乗させ、玉車に乗つて行進する、といつた形である。⁽²⁸⁾そして、そのなかの趙東潤は「趙別当」として、宋秉畯は「宋伯爵」として、政府当局の検閲により書き換えられる前までは、それ

ぞれ『新国王』の登場人物になっていた。

それでは、英親王の留学の実際の目的は、どこにあったのだろうか。

まず、一九〇八年八月二〇日付の『大阪朝日新聞』は「天声人語」で、伊藤博文が英親王に「大和魂の本義を論ず」る場面を紹介したうえで、記者の見解として、「我が國に永年の教育を受けたまふ間に、朝鮮魂は亡くなつて日本魂になりたまふことぢやらう」などと述べている。

それに比べ、英親王が研修旅行のため東北地方を訪れた際、水戸で開かれた歓迎会で伊藤博文が行った演説文には、「今晚人力車より當地の官民有志諸君と多数の小學生徒が提灯を列ねて行くを見たが、誠に友邦の情誼を重んじ、殊に日韓兩國の關係は殆ど兄弟もただならざるものがある」というふうに出ている。²⁹

片方は、「朝鮮魂は亡くなつて日本魂になりたまふ」との指摘であり、片方は、「誠に友邦の情誼を重んじ」との指摘であるので、両者明らかに矛盾しているが、恐らく、日本でよく言われる「本音」と「建前」の使い分けであると理解して差し支えはないだろう。とすれば、戯曲『新国王』の検閲騒動は、この「建前」に引っかかったことになる。

当時は、一九〇〇年の一月一日に改正された「演劇取締規制」がそのまま適用される時代で、その第二章「興行の部」の第二

三条を見ると、「勸善懲惡……」などに並んで、上演を禁ずる対象として、「政談ニ紛ハシキモノ」という条がある。³⁰これを根拠に、『新国王』の検閲も行われたものと推定される。

実際、『大阪毎日新聞』一九一〇年九月二三日の「演芸世界」欄には、「帝國座の如きは當地の模範とする劇場」であるから、「是れまでの脚本なども、當署限りにて認可を與へて來たが、今度のは藝題が朝鮮王とあるので、脚本を本部へ廻したところ、協議の結果、不認可となつた」というふうに出ている。要するに、検閲の担当者である警察から見て、まず戯曲の題目から問題になったわけである。

この不認可を受けて、川上音二郎は、直ちに直訴する。同じ新聞の翌日の記事によると、川上は高崎知事の官舎を訪ね、再び認可を請求した。しかし結果は、天野保安課長に呼ばれ、「政事と藝術を混同せず、昔の川音カウオンでなく、今日の川上カウカミとなつて實行を期しては如何」と注意される運びとなった。

それで、『新国王』と急遽外題を変え、一〇月一日からやっと上演にこぎ着けたわけであるが、ここで注目したいのは、「昔の川音カウオンでなく、今日の川上カウカミ」という件である。周知のとおり、川上は、一八九四年の一連の日清戦争劇により演劇界の全面に躍り出るまでは、自由民権運動の熱烈な支持者で、「オッペケペ節」に代表される激しい政治宣伝のあまり、投獄されたことも数多くあった。したがって「川音カウオン」というのは、まるで川カウの音のようにうるさく音を立て、

世間を騒がせた張本人であった川上の過去の呼び名であり、それを保安課長がひねくって言った言い方であったのかもしれない。

6 川上の上演意図

では、当時すでに演劇界のリーダーの一人であった川上音二郎は、なぜ、このような注意を受けながらも『新国王』の上演に固執したのだろうか。財政上の事情など、いろいろな理由があっただろう。しかし、前年度の一九〇九年の一月二十六日、ハルビンで安重根^{アンジュンクン}（一八七九—一九一〇）の銃に撃たれ、不帰の客となった伊藤博文に対する鎮魂の意味を持たせていた舞台であったからこそ、敢えて上演にこぎ着けたとは言えないだろうか。

実のところ、伊藤博文は、音二郎・貞奴夫妻をなにくれとなく支援していた人で、特に貞奴とは、音二郎と結婚する前の、葭町の名妓の時から知り合いである。伊藤博文は、貞奴を水揚げしたのはもちろん、結婚した後も、川上音二郎が日清戦争の取材のために韓半島に渡る時、蔭でビザの問題を解決してやったばかりか、現に『新国王』の上演場所である帝国座も、伊藤博文の提案によって建てられた劇場である。

では、このような因果があったにせよ、なぜ川上音二郎は、『アルト・ハイデルベルク』の翻案物である『朝鮮王』、すなわち『新国王』を以て伊藤博文の霊を慰めようとしたのか。

それは、一言で言うところ、川上がドイツでの邂逅を重ねていたからに外ならない。すでに紹介したとおり、巖谷小波がドイツのベルリンに滞在したのは、一九〇〇年の九月から約二年間のことである。そしてその間、川上一座はヨーロッパの巡回公演の一環としてベルリンにやってきて、一九〇一年の十一月一八日からは『武士と芸妓』などを上演したし、一二月には、巖谷小波作『音曲聲』のスタッフもしていた。

そこへ、実は、伊藤博文も合流していたのである。伊藤博文は、アメリカからロシアへ向かう途中、ベルリンにやって来ては、旧知の川上夫妻を呼んで、三味線をひかせながら『出雲節』を歌ったりするなど、一九〇一年の年末を楽しんでいた。⁽³¹⁾そして「伊藤侯爵歓迎会」と題した文章が『小波洋行土産』のなかに残っているのを見ると、当地で、巖谷小波とも交流があったはずである。

さて、『アルト・ハイデルベルク』と言うと、この作品が初めて舞台にあがったのは、一九〇一年一月二二日、「ベルリン座」においてである。この作品は、一夜にして作家のマイアー・フェルスターを有名人にした作品であるから、当時ベルリンに滞在していた伊藤博文、川上夫妻、巖谷小波の四人が、揃って現地でこの作品を観ていたことは十分考えられる。そしてこのような事実とは、『新国王』の第二場の「青柳亭の場」が、「伊藤の洋行に随行した香山の経営する料理屋」の青柳亭として設定されていることから、うか

がい知ることができる。

以上の検証で、川上音二郎が検閲を受けながらも『新国王』の上演に拘っていた理由が、浮き彫りにされたと思う。それは、言うまでもなく、日頃の支援者伊藤博文に対する鎮魂であり、もしその意味が多く働いたとするならば、ドイツでいっしょに観劇した『アルト・ハイデルベルク』こそ、鎮魂のための最適の作品であったに違いない。

そうすると、『新国王』の書き手が、興行師の川上音二郎よりは、文筆家の巖谷小波であったことも、十分考えられる。⁽³²⁾なお、このような仮説は、川上音二郎自らが『新国王』の中のいわゆる伊藤博文の役割、すなわち王子の個人教授の文学博士井殿弘役を演じていたことから傍証できると思う。⁽³³⁾

では、このような意図の下で行われた『新国王』の舞台そのものに対する評価は、どうだったのだろうか。一九一〇年一〇月四日の『大阪毎日新聞』には、次のような劇評が載っている。

川上は「新国王」の井殿博士を勤めて居る、例の如く熱心だが此の劇が全体に灰色である如く井殿博士も灰色である、含蓄はあるがモツサリして居る、京都へ歸つて來てからの博士は或處に一點の花やかな個所があらいたい、此人を其まゝで直ぐに墓場へやり度くはない。

引用のなかの「京都へ歸つて來てから……其まゝで直ぐに墓場へやり度くはない」という指摘は、原作の『アルト・ハイデルベルク』の場合も、ユトナー博士がこれといった理由もなく早死にしましうから論外にするが、「此の劇が全体に灰色である如く井殿博士も灰色である」という指摘には、吟味するに十分なものであるように思われる。

それはおそらく、『新国王』の場合、英親王の留学目的を、原作のカル・ハインリヒ王子の留学目的とは違った形に書き改めたことによつて、かえつて、劇としてのバランスを欠いた様子を呈していたから、観客がそのように感じていたのではないだろうか。

言い換えると、川上の演ずる井殿博士の役割を無理に拡大し、しかも博士をして、当時の日本の「本音」を発言させた。そしてそれは、何の政治責任も持たない演劇人川上自身の韓国観でもあった。⁽³⁴⁾

ところが、伊藤博文の場合は、立場が違う。伊藤博文は、すでに引用した演説文のとおり、「建前」を本領とする政治家である。にもかかわらず、『新国王』のなかの井殿博士すなわち伊藤博文は、彼自身に対する鎮魂の意味を持たせているため、かなり強調されているばかりか、「本音」を言っている。⁽³⁵⁾

この「建前」と「本音」の食い違いが、舞台の上での劇的バランスを欠く結果を招き、それがただちに検閲につながったということ

である。ちなみに、原作の『アルト・ハイデルベルク』がバランスを欠いているなどと指摘した人は、今まで一人もいない。

注

- (1) 『日本語大辞典』講談社、「川上音二郎」を参照。
- (2) 日本で言う朝鮮半島を、この論文では、韓国での現在の呼び名を重んじ、韓半島と呼ぶことにした。それは、国の名前の韓国と朝鮮の場合も同じである。ただし、一次資料に朝鮮と出ている場合と、その説明に限っては、これに固執しない。
- (3) 柳永二郎『新派の六十年』河出書房 一九四八 三〇頁。
- (4) 岡本綺堂『明治の演劇』大東出版社 一九四二 一五二―三頁。
- (5) 柳永二郎 前掲同書 一六四―五頁。
- (6) 川上の独特な姿は、彼が一八八七年の二月、京都阪井座で里見八犬伝の御注進役を勤めた時から始まったと言われている。
- (7) 七つの幕は、一八九四年八月九日の『都新聞』によれば、「第一黒龍江日軍々營の場、第二 北京城外關門の場、第三 支那中央電信局の場（同返し）帝國新聞記者俘虜の場、第四 北原城内清軍々獄の場、第五 李將軍面前帝國新聞記者痛論の場、第六 天津沖海戰清艦沈没の場、第七 北京城日軍乗取の場」である。舞台の上での場面は、村松梢風『川上音二郎（上）』潮文庫 一九八五 一九七頁を参照。
- (8) 『都新聞』一八九四年一〇月二四日など。なお、地名などのルビは、読みの便宜を図るため筆者が付け加えたもので、以下、一次史

料の外は同じである。

- (9) 戦闘の詳しい内容は、旧参謀本部編纂『日本の戦史―日清戦争』徳間文庫 一九九五年を参照されたい。
- (10) 『読売新聞』一八九四年一月二五日。
- (11) 『都新聞』一八九四年一月二三日。
- (12) 『都新聞』一八九四年二月一日には「丁無南 朝鮮人 以文」と出ているし、当時のポスターには「同従者チャムナ 丁無南」と記録されている。
- (13) 『萬朝報』一八九四年二月二二日。
- (14) 白川宣力『川上音二郎・貞奴―新聞にみる人物像』雄松堂 一九八五年を参照。なお、本論文に使われた新聞記事の多くは、この本を参考にしたことを付け加えておく。
- (15) 河竹繁俊『日本演劇全史』岩波書店 一九五九年には、新派の発生期は一八八八年から一九二三年、興隆期は一八九四年から一九〇二―三年、全盛期は一九〇三―四年から一九〇九―一〇年、衰退期は一九〇九―一〇年から一九二五年、中興期は一九二六年から一九三二―三年、新生新派期は一九三七年以後と分類されている。
- (16) 『都新聞』一八九五年一月二五日。
- (17) 大笹吉雄『日本現代演劇史』白水社 一九八五 六〇頁。
- (18) 白川宣力『明治期西洋種戯曲上演年表（二）完』『演劇研究』一八号、一九九五・三。
- (19) 松居松葉『思ひ出』明文館 一九一三 一―二頁。松居松葉は日本で初めて『アルト・ハイデルベルク』を正式に翻訳した人であり、『思ひ出』はその題目である。

- (20) 倉田喜弘『近代劇のあけぼの』毎日選書 一九八一 二五一頁。
- (21) 巖谷小波「川上一座の興行」および「獨逸人の日本語劇」『小波洋行土産』上巻 博文館 一九〇三 二六四～六頁。
- (22) 『思ひ出』の上演は、土肥春曙がカール王子、松居須磨子が相手役のケティーをそれぞれ演じた結果、二日間の延長公演を行うなど、一般人には好評を得たが、知識人の間では疑問の声も多かった。それは主に、宮廷生活に対する風刺、独り道を歩まざるをえない君主の孤独とそれに伴う道徳の問題など、いろいろなテーマを含んでいる『アルト・ハイデルベルク』を、あまりにも思い切って恋愛中心の「甘い物」に仕立て直してしまったという指摘に代表される（清見陸郎『思ひ出』を見て『演芸倶楽部』一九一三・三月および『舞台協会と無名会』『演芸倶楽部』一九一五・一二月など）。にもかかわらず、このような傾向は、その後の大正期、昭和期におけるこの劇の上演においても、変わることはなかった。
- (23) 巖谷小波『思ひ出』の思ひ出『演芸倶楽部』一九一四・一。
- (24) テーマの引用は、番匠谷英一訳『アルト・ハイデルベルク』岩波文庫 一九三五 一五一頁より。
- (25) たとえば「あゝ京都」(『京都日出新聞』一九〇三年三月二八日)には、「拙者は某州の國守、侯爵春海家の家従、古津正直と申す者で御座るが、此度御當主香留夫様が、京都大學の聴講生に成つて、向ふ三年間、此の京都に御滞在の事と相成つた。〈中略〉殊に又御側には、御幼少の頃から御教育係り、文學士湯戸直也殿、及びかく云ふ古津めも、常時御附き申す次第である。」というふうに出ている。
- (26) 「写真2」のような旧仮名遣いの手書き文を、読みやすくするた

- め、一部の漢字を平仮名にし、現代仮名遣いに直した。
- (27) 番匠谷英一訳『アルト・ハイデルベルク』前掲同書 一九〇二 五頁。
- (28) 岡崎清編『英親王李垠伝』共栄書房 一九七八 七一～七二頁。
- (29) 春歌公追頌会『伊藤博文伝』下巻 統正社 一九四〇 八五三頁。
- (30) 『日本芸能史』七巻 法政大学出版局 一九九〇 二四一～二頁。
- (31) 童門冬二『川上貞奴』成美堂出版 一九八四 一四七頁。
- (32) 巖谷小波は、ベルリン大学付属東洋語学校の日本語講師としてドイツに滞在する間、三回も『アルト・ハイデルベルク』の上演を見ている。(巖谷小波『思ひ出』の思ひ出「前掲同書」)
- (33) 『大阪毎日新聞』一九一〇年一〇月一日の『新国王』の番付け記事。
- (34) たとえば姜東鎮は、『日本言論界と朝鮮』(知識産業社 一九八七 一三頁)のなかで、併合当時の雰囲気は、「日本のはとんどすべての新聞・雑誌もいろいろな併合正当化論と朝鮮経営論を掲げ、併合支持の一大キャンペーンを繰り広げた(訳筆者)」というふうに指摘している。時の雰囲気は敏感な川上音二郎がこのような雰囲気に乗っていたことは、十分考えられる。
- (35) 人の「建前」と「本音」の使い分けを明確にするのは非常に難しいことで、伊藤博文の場合も、その例外とは言いがたい。たとえば、彼の韓国統監としての対韓政策だけを見ても、第三次日韓協約を境にして、いわゆる「文化政策」から「自治育成政策」へと微妙な変化を見せている。一方、このような韓国の独立を維持したまま

の対韓政策とはうらはらに、「もとより、伊藤も、他の政治指導者と同様に、究極の目標として朝鮮併合を考えていたことは疑いがない」(森山茂徳『近代日韓関係史研究』 東京大学出版会 一九八七 二〇一頁) という指摘もある。